

つれづれなるままに 第1号



令和元年6月19日（水）発行

校長 深谷 浩一

こんな学校をめざします！

昨年2年ぶりに本校に復帰して、6年前の教頭時代に始めた『つれづれなるままに』を「校長室だより」として再開しました。ところが、なかなか「つれづれなる」状態（つまり、「暇をもてあましている状態」のこと。）にはならず、第1号の発行が6月になってしまい、最終的な発行数も11号止まりとなってしまいました。

新しい年度を迎えても、なかなかこの「校長室だより」に手が回らず、今年も今回が初めての発行ですが、引き続きお付き合いの程、よろしくお祈りします。

さて、今回取り上げるのは、「これからこの中央高校をどんな学校にしたいのか」という私の校長としての希望と、それを実現するために「これから学校としてどんなことに取り組んでいくのか」という学校の進むべき方向性についてです。

① 「人の役に立ちたい」と思う生徒が多い学校

誰もいずれは社会の中で働きます。そして働いた対価を得て暮らしていきます。自分に適した仕事を探す上で、「人の役に立ちたい」とか「社会に貢献したい」と思って仕事に就くのか、仕事は好きではないが、収入がないと生きていけないから仕方なく金のために働くのか、考え方は人によって様々です。ですが、その前者の考え方で生きていく人間になってほしいと考えています。そのために、学校では一体何をすればよいのでしょうか。

② 人を差別する生徒がいない学校

人を差別してはいけない、と人は小さいときから教わってきていますが、案外無意識のうちに人を差別してしまうことがあります。やっかいなのは、差別しても差別しているという意識が希薄なことが多いことです。

女性に対する差別、高齢者に対する差別、韓国人、中国人などの外国人に対する差別・・・しかし、外国人に対する差別の多くは、メディアによって創られた差別です。北朝鮮に一度も行ったことがなく、北朝鮮の人と会ったこともない人が、北朝鮮の人に対して偏見をもち、差別意識を持ったりします。安易に人を差別する人間にならないようにするために、学校では何をすればよいのでしょうか。

③ 十年先の生き方を考えている生徒が多い学校

「進路を選択する」ということは、大学に行くか専門学校に行くかを定めることではありません。「幼稚園の先生になる」とか「医者になる」とか「消防士になる」とか「市役所の職員になって小美玉市のために働く」とかを定めることです。それが決まったら、次は「その進路に進むために、本校を卒業した後はどこに行くかを定めること」です。

大学や専門学校に行く人は、その選択がたとえ間違っていたとしても、後で修正が効きますが、本校を卒業した後にすぐに就職してしまった人はそうはいきません。その就職が失敗だった時には退職するしかないからです。その意味で、就職する人こそ、本当にこの就職先で、十年先、自分の夢や生き方を実現できるかどうかを見極める必要があるのです。

自分の「天職」を見つけ、その職を全うすることができるようにするために、今、学校では生徒にどんな力を養えばよいのでしょうか。

④ 運動能力を活かせる仕事に就く生徒が多い学校

職業の適性の中に「運動能力」があります。いくらあこがれの職業であったとしても、その仕事をこなすために必要な最低の「運動能力」がないと仕事が勤まりません。たとえば、どんなに「警察官」や「消防士」になりたくても、犯人と格闘し逮捕できるだけの体力や運動神経がなければ警察官は勤まりません。犯人に向かっていく「勇気」も必要でしょう。「消防士」の場合も同じように強靱な体力や燃えている建物に飛び込んでいく精神力は不可欠でしょう。そんな生徒でないと勤まらない仕事もたくさんあるのです。

優れた運動能力をもつ生徒には、その能力を活かした職についてもらいたいと願っていますが、そんな生徒を育てるには、学校は一体何をすればよいのでしょうか。

今回は、中央高校の「目指す生徒像」をまとめてみましたが、次回は、「どうすればそんな生徒が育つのか」、「そのために学校は何をするのか」について書きたいと思っております。